

Ⅶ. 随想

忘れられない患者

藤原 建樹（静岡てんかん・神経医療センター名誉院長）



N君はてんかんセンター黎明期に担当していた患者である。やっと授かった一粒種としてことのほか大事に育てられていたが、5歳のある日、飴玉をしゃぶりながら柱にもたれていたところ、不意の尻もちで気管に飲み込み窒息。一命はとりとめたが、間もなく大発作でてんかんを発病。以後、一瀉千里、あらゆる治療に抵抗し、半年後には複数の発作型が頻発するLennox-Gastaut症候群に変容していた。諸医を巡って7歳の時にてんかんセンターを受診した。バルプロ酸（VPA）など6剤の抗てんかん薬服用にもかかわらず、覚醒脳波は広汎性の棘・徐波複合ではほぼ占められ、非定型欠神と失立発作が間断なく続く欠神発作重積状態であった。肩から1メートルほどの手綱を母親がいつも持って歩いていたが、それでも受傷が絶えなかった。抗欠神薬の増量などいろいろ試みたが副作用ばかりが目立ち、薬剤整理に方針を替えた。多量に服薬していたフェノバルビタール（PB）の減量が進むにつれて発作も減り、除去できたときには発作は消失し、眠気・ふらつきも改善した。ろれつも回り、減らず口をたたけるようになり、母親ようやく笑顔もどってきた。事故は彼女の目の前で起こった。しかし、それをつかぬ間、まもなく全般強直発作が入眠期に頻発、日を追うごとに増悪し、強直発作重積状態に陥った。覚醒中の非けいれん発作は消失したままであった。ジアゼパムでは歯が立たず、ペントバルビタールを静注してしのいだ。毎晩、静注もできず、フェニトイン（PHT）を経口的に急速飽和したところ強直発作はようやく収まった。すると覚醒中の発作が再燃、結局、振り出しに戻ってしまった。

当時の院長、和田豊治先生は精神科の教授を歴任してきたが、ボストンのこども病院に留学経験があり、こどものてんかんにも造詣が深かった。毎日8人の初診患者を診察し、病棟にも毎週、回診に見えていた。先生に言われるままに処方方を調整したが発作はびくともしなかった。回診のたびに示される処方箋はN君の発作には無力であった。てんかん重積状態を目の前にすると処方変更による効果発現まで待つことができない。毎週のように処方方がくると変わり、これが入院治療の敗因であった。

干渉を排して、自分自身で治療方針を模索するしかないことを決し、このまま入院していても良くはならない、すこし考えがあるので外来治療に切り替えたい旨、両親に提案したところ快諾していただいた。

母親の手綱から離れて訪問学級に行っている間には不思議に発作が少なかった。覚醒度があがれば発作も減るのでと、さらなる減量を試みた。VPA、PHT、ニトラゼパム（NZP）、クロナゼパム（CZP）4剤から、CZPに手をつけた。CZPは反跳発作が怖い。CZPの漸減除去に月単位の時間を要した。減量がすすむにつれて薄皮を剥がすように発作は減り、CZPが除去できた時には発作は消失し、行動面も改善していた。その頃、CZPが逆説的にてんかん重積状態を誘発することがあると国際誌に短報が載っていた。

和田先生に発作の転機を報告したところことのほか喜んでくださった。後年、担当医が変わり、NZPを減量したところたちまち覚醒中の発作が頻発し、慌てて処方をもどして事なきを得た。本当には寛解していなかったのである。

治療経過を振り返ってみると、PB除去で欠神重積状態が消退したが、けいれん重積状態が生起、これにはPHTが有効であったが、欠神重積状態が再燃していた。互に拮抗するかのよう消長して治療に難

決したが、CZPの除去で最終的に寛解に至った。CZPは欠神発作にも有効とされているが、N君には合わなかった。「polypharmacyからmonopharmacyへ」は当時すでに喧伝されていたが、NZP除去による発作の増悪はスローガンどおりにはいかない難しさを教えてくれている。rational polypharmacyの好個の例である。ともあれ、いかなる難治例でも過剰投与が好ましくないことをN君で経験した。

和田先生が退職される際、改めててんかんの全について個人的に総括していただいた。静岡に欠けているものはリハビリテーション部門である。今後はこの部門の充実が急がれる。ドイツの大学には子どものてんかん学の講座があるが日本はまだまだである。などなど有益な持論を聞かせていただいた。ご自身の今後については決まっていないようであった。締め言葉は「てんかんは潰しが利かないんだよ」であった。

その後も折にふれ著作物を送っていただいた。「てんかんの歴史、1と2」はまだ本棚の片隅にある。この原稿を書いているうちに礼状を出していないことにふと気が付いた。少しは読んでからでないかと心のこもった礼状は書けない。1ページも読まないうちに、日経ち、月経ち、年経ち、そうこうするうちに先生も故人となられた。敬意を表する機会は逸したが、その学恩は忘れ難い。

てんかん治療の奥義を学ぶには先達の指導、成書や文献、いずれも欠かすことはできないが、確かな指南書は一人ひとりの患者にある。

地元で転医してからもN君の発作は寛解したままであったが、そのうちに音信も途絶えた。父親からの最後の年賀状には、Nくんが「豆腐屋に就職しました」と書かれていた。40年も前のことである。いまだに忘れられない患者である。